

カザフスタン見聞記（上）

カザフスタンという国

諏訪一幸

8月下旬の4日間、私は学生時代のゼミの先輩を中心とする10人の旅行団の一員として、中央アジアはカザフスタンに初めて行ってきました。きっかけは、「ちょっと遊びに来ない？」という、ゼミの先輩の一言。その発言の主とは勝茂夫・ナザルバエフ大学長。カザフスタンで最も有名なわが同胞です。そして、発言の場は東京都内のある雀荘（だったらしい）。

カザフスタンという国。実は、とても行きたかったところでした。というのも、2013年以降、習近平政権が大々的に進める国家戦略「一帯一路」において、同国は中国と欧州の間に位置する重要な「結節点」として期待されているからです。日程の関係で、訪問先は首都のアスタナとその郊外にあるアルジールだけでした。しかし、前述の勝学長や川端一郎大使をはじめとする現地の日本大使館のみなさんのご協力、そして、団の秘書長を務めて頂いた名越越郎拓殖大学教授の八面六臂のご尽力などのおかげで、カザフスタンという若い国の現状や課題、そして、何よりもその躍動感を十分に感じる事ができました。

そこで、ここでは、中国問題研究者の私が初めて目にしたカザフスタンについて、簡単な印象を記したいと思います（上下2回。下のテーマは中国・カザフスタン関係を予定）。

渡航前イメージ

カザフスタンという未踏の国について、渡航以前に私が有していた知識とは、当然のことながら、非常に限られたものでした。ソ連崩壊によってできた国で、建国は1991年。カザフ族を中心とする多民族国家で、人口は約1800万人。面積は日本の約7倍で、世界で第9位の広さ。石油や天然ガ



写真 1

スなど地下資源が豊かで、一人当たりの名目 GDP は約 7500 米ドルと、中央アジア諸国の中で最高の生活水準。首都アスタナは 1997 年に南部アルマティから遷都された近未来都市で、人口は約 90 万人。厳寒期には最低気温が氷点下 40℃ 近くにも達し、モンゴルのウランバートルと一、二を競う「世界で最も寒い首都」。そして、私が一番気になっていた、ソ連時代からトップを務めるナザルバエフ大統領の「個人独裁」。

このような情報とイメージで、成田空港を飛び立って約 10 時間後（韓国インチョン空港経由）、深夜のアスタナ・ナザルバエフ国際空港に到着しました。

近未来都市アスタナ

アスタナに初めて足を踏み入れて感じたのは、巨大建築物の多さとそのユニークさでした。私は一昨年、学術調査団の一員として訪問した平壤でも巨大建築物の多さに目を奪われました。ただ、アスタナの場合は、1997 年の遷都以降、ほぼゼロから街づくりが始まったということもあり、建物のユニークさという点では平壤や中国上海の浦東地区をも上回るものがありました。

巨大建築物は、首都移転後に開発されたイシム川の左岸と右岸の一部に集中していました。神話に基づいてデザインされたシンボルタワー「バイテレク」（「ポプラ」の意）【写真 1】、宗教学センター「平和と調和の宮殿」（通称「ピラミッド」）【写真 2】、中央アジア最大級のモスク「ハズレット・スルタン・モスク」【写真 3, 4】、そして、初代大統領図書館「ナザルバエフ・センター」【写真 5】など、きりがありません。



写真 2



写真 3,4



写真 5



都市の基本設計は故黒川紀章氏が行い、個別の建築物の多くを著名な英国人建築家ノーマン・フォスター氏が設計したそうなので、その派手さも当然といえば当然なのかも知れません。資源国の持つ強みや勢いを、これでもか！と実感させられました。

もっとも、この近未来都市に住む人々もその多くが遊牧民の子孫であったり、かつて遊牧生活を送っていた人々です。滞在時間は短かったものの、私たちは、その生活の一端をイシム川右岸の旧市街地にある代表的バザール「アルチョム・バザール」で見ることができました。活気ある六階建て建物の一階は、色とりどりの野菜、果物【写真6】、そして、



写真 6

乳製品、さらにはカザフスタンの代表的お土産であるチョコレートなどで溢れかえっていました。初めて飲んだラクダミルクは、結構いけました。冬の寒さが厳しいアスタナですが、現地の人によると、「ハウス栽培もあるし、外国からの輸入品もある。冬になると生鮮食料品の値段は確かに高くはなるが、野菜も果物も一年中豊富にある」そうです。



写真 7

【写真7】 カザフスタンでは羊肉や馬肉も食されます。写真は前菜の馬ハム。

若い国

カザフスタン滞在一日目にして、私は「この国の将来は明るい」との第一印象を抱いたのですが、それは若者や子供の多さに加え、国旗の鮮やかで澄んだ青色にも似た、彼らの笑顔があったからです。ある資料によると、日本の平均年齢が約 47 歳であるのに対し、カザフは約 30 歳。どうりで街の景色が違うわけです。そして、この第一印象は、いくつかの政府機関を訪問していく過程で、確信にも似たものになっていきました。というのも、訪問先で対応してくれた各組織のトップが 35 歳（初代大統領図書館附属博物館副館長）、36 歳（アスタナ国際金融センター事務局長）、41 歳（国営テレビラジオ公社総裁）といずれも若く、自信に満ちていたからです。

ところで、今回の旅で私たち一行の日本語通訳を務めてくれたのが 1983 年生まれで一児の母、グゼリヤさんでした。カザフ語、ロシア語、ウイグル語、英語、日本語、いずれもペラペラの才女ですが、このグゼリヤさん、「私の同世代は平均 4 人から 5 人子供がいます。私ももっと欲しい」そうです。それを聞いて、私は思わず、「そんなに大勢いたら、育てるのが大変でしょう」と言ってしまったのですが、彼女は、「いいえ。教育費は公立学校であれば高校まで無料ですし、奨学金制度も充実しています。子沢山だと免税対象にもなります。カザフスタンでは家事は 100%女性の仕事ですが、きょうだいが多ければ、上の子が下の子の面倒を見るので、仕事にも影響ありません」と、平然と言ったのけました。国としてのこうした制度設計が若い国の基礎を支えていることを知った次第です。

国家 100 年の計である人材育成に目を向けると、日本と英国に留学経験のあるグゼリヤさんも羨むのがナザルバエフ大学。はい、われらが勝氏が学長を務め、大統領の名前を冠した、カザフスタンの最高学府です。同大学は 2010 年に設立されたばかりの、理系を中心

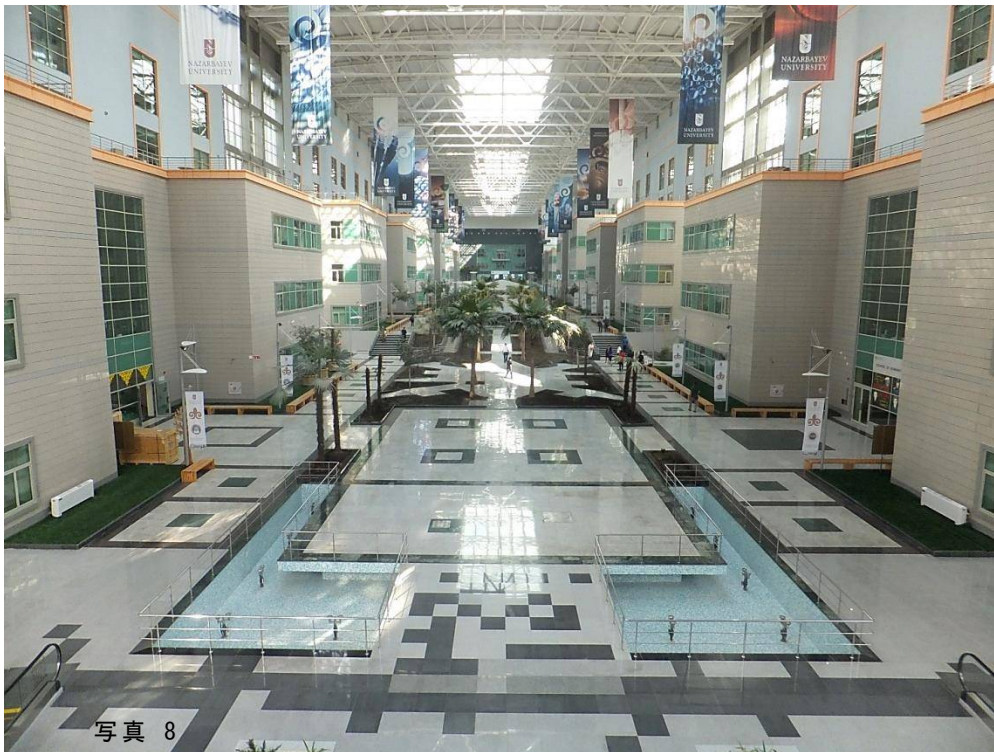


写真 8

とした総合大学ですが、授業はすべて英語、全教員の 77%が好待遇で招かれた外国人研究者（うち、日本人が一人）という特色を持っています。そして、その成果はすでに形になって表れています。勝学長によると、少なからぬ卒業生がオックスフォード大学やマサチューセッツ工科大学といった世界のト

ップクラスの大学院に進み、研鑽を積んでいるそうです。

ところで、宮殿のようなナザルバエフ大学で、私たち一行はどのようなわけかロボット工学研究室と人工知能研究室に案内されました。非理系脳の私には、そこで何が行われているのか、結局のところ全く理解できなかったのですが、大学見学を通じて一つの強い疑問を持ちました。それは、「厳寒期にこの広大な大学内建築物の空間【写真 8】を快適なものにするには、一体どれくらいの石油や天然ガスが必要なのだろうか」という、資源小国の国民の多くが抱くであろう、極めて現実的なものでした。

万博を通じて見えたお国事情

日本ではあまり知られていませんが、アスタナではおりしも国際博覧会（万博）が開催されていました（6月10日から9月10日までの3か月間）。テーマは「未来のエネルギー」。川端大使をはじめとする関係者の方々のご尽力で、短い滞在期間であるにも関わらず、私たちは日本館とカザフスタン館を見学することができました。また、私は「絶対見逃すわけにはいかない！」ということで、ゼミ先輩の濱本良一国際教養大学教授とともに中国館も見学してきました。そして、「未来のエネルギー」というテーマへの三者三様の対応ぶりを確認しましたが、それは非常に興味深いものでした。

まずは日本館です【写真 9, 10】。

頂いた資料によると、コンセプトは「日本の省エネやエネルギーミックスへの取り組み、LED・藻類バイオマス・水素等の最先端技術、またその背景にある日本の文化や精神性等を、驚きと楽しさあふれる体験や体感を通じて伝える」でした。実際、展示を見ると、東日本大震災と福島第一原発事故を教訓に、テーマに沿った真剣な取り組みを感じま

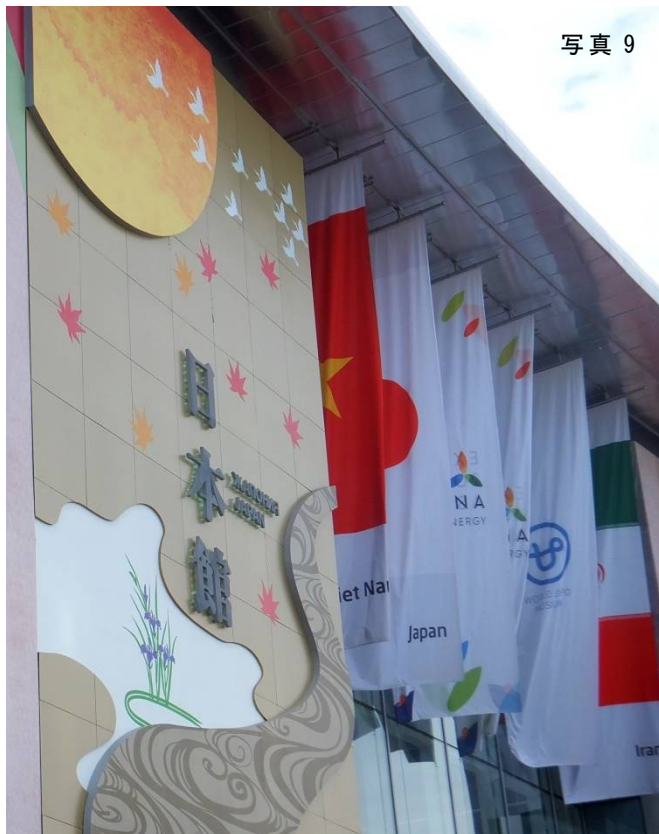


写真 9



写真 10

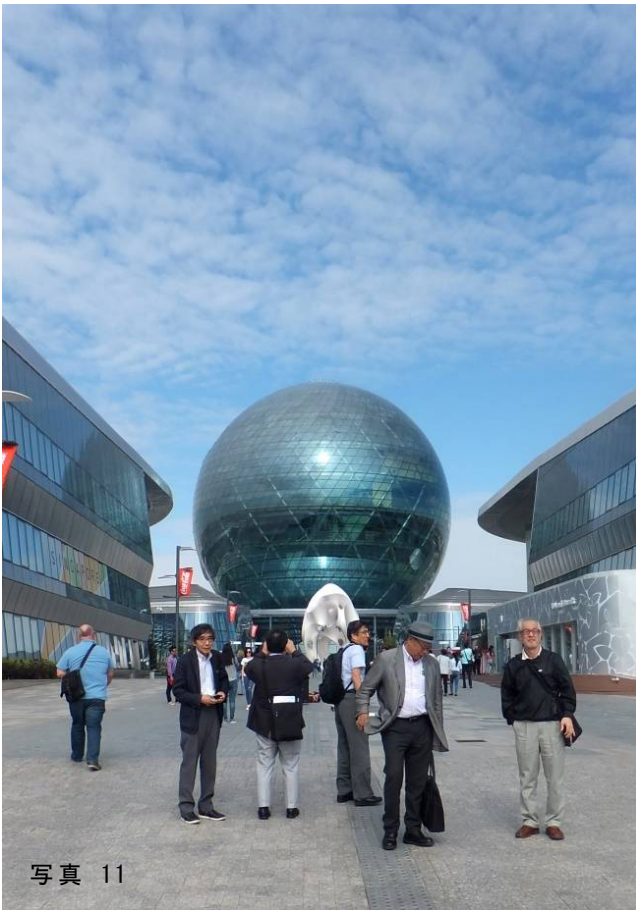


写真 11

した。説明をして下さった中村富安政府館館長によると、参加国のうち日本が唯一、館内での説明をロシア語ではなくカザフ語で行っていることから、日本館に対する地元の人々の評判はすこぶる良いとのことでした。

次に足を運んだのがカザフ館です【写真11】。同館は万博会場の中心に位置し、地上8階立ての球体という威容を誇っていました。それは、欧米を除くと日本、韓国、中国に続く4番目の万博開催国だという喜びを象徴しているかのようでもありました。そして、日曜日ということもあったのでしよう、館内は多くの家族連れで賑わっていました。中央に設置されたお洒落なエレベーター【写真12】と頂上階から眺める周囲の景観は、確かにカザフスタンという国の明るい未来を展望させるものでした。

しかし、展示はビジュアル効果追及の総花的なもので、国家として描く総合的な「未来のエネルギー」像を私は見出すことができませんでした。カザフスタンを良く知る日本の方によると、政府職員を含む同国国民の省エネ意識は総じて低いとのことでした。資源を頼りに高度成長を謳歌してきた人々の反応としてはむしろ当然なのかも知れません。しかし、近年の資源安のあおりを受け、2015年と2016年のカザフのGDP成長率は1%台にまで落ち込んでいます。したがって、産業構造の転換や資源に代わる輸出製品創出などの政策課題に鑑みれば、「未

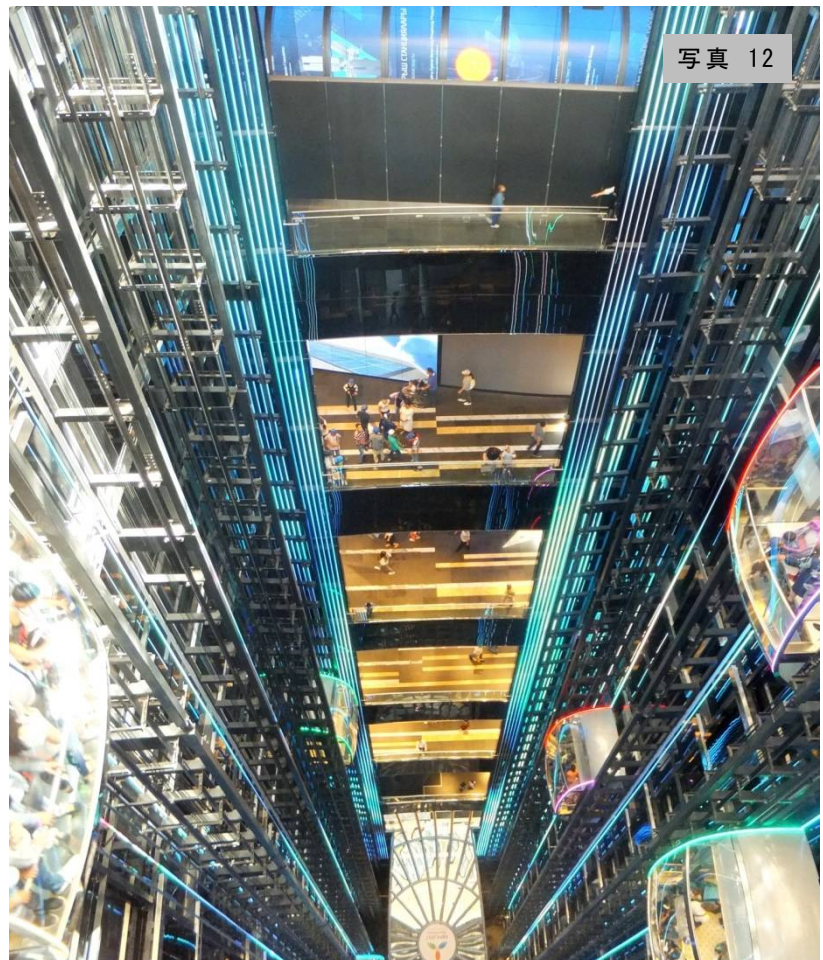


写真 12

来のエネルギー」をテーマとする万博開催は、カザフにとってまさに時宜にかなったものだったはずです。私は、今回の一大イベントが一過性のものに終わらないことを切に願っています。なお、万博終了後の施設と敷地には、アスタナ国際金融センターが入るそうです（前出の同センター事務局長談）。

そして最後が、「未来のエネルギー 緑のシルクロード」をコンセプトにする中国館でした。収容スペースの狭さを理由に入場規制をかけていたこと、館の入り口でお決まりの「客寄せ興行」（例えば獅子舞）【写真 13】が行われていたことなどから、館の前には長蛇の列ができていました。私たちも 40 分近く待たされたので、期待感は否が応にも高まりました。水車から始まるエネルギー史の説明と展示が陳腐だったこと、国の威信をかけて売込み中の高速鉄道の運転体験ルームが閉鎖中だったことは、ちょっと残念でした。しかし、館のメインコーナー「未来エネルギー夢劇場」で上映された 3D 映画が描く、「核融合」を基調とした未来のエネルギー像には、国家としての強い意気込みと方向性がみてとれました。



以上の三館以外に、私は、行列のできていない国家館にもいくつか入りましたが、その多くが簡単な国情紹介にとどまっていた。そして意外にも、このような閑古鳥館の一つが上海協力機構館だったので。

カザフ・アイデンティティの模索

今回お目にかかったカザフの皆さんとの交流を通じ、私がしばしば耳にし或いは感じたのは、「カザフスタンという国家のアイデンティティを如何に構築するか」との問題意識でした。より正確には「ロシアとは異なるカザフスタン」です。

アスタナ金融センターの事務局長は、「カザフスタンにはロシアのような不安定さはない」と強調し、同国の経済建設における日本の積極的な関与を呼びかけました。また、国営テレビラジオ公社総裁は、国内の他メディアの番組で用いられる言語はロシア語とカザフ語がおおむね半分ずつであるのに対し、自分のところでは100%カザフ語であることを誇らしげに紹介してくれました。また、同総裁は、「カザフはロシアの一部でも、イスラムの一部でもなく、国際社会の一員である」とも言っていました。

「台湾人／香港人としてのアイデンティティー構築」は私の研究生活の一部を占める問題意識ですが、遠いカザフの地でもこのような場面に遭遇するとは思ってもみませんでした。しかし、ちょっと考えればこれは当然の話です。独立前のカザフスタンはソ連邦を構成する共和国の一つだったのですから。また、ロシアは現在でもカザフスタンの国内数か所に軍を駐留させていますが、その中で、宇宙基地の町として私たちにも馴染みのあるバイコヌールは2050年までロシアが租借することになっています。さらに、首都を南部のアルマティから北部のアスタナに移したのは、南部に比して北部で強いロシアの影響をにらんでのことだとの分析も聞きました。中央アジア5か国の中で、ロシア人の比率が最も高いのがカザフだそうです（カザフ人63.1%、ロシア人23.7%）。

ただ、誤解してはならないのは、ロシアとの相違の強調は決してロシアに対する単純な敵対意識や恨みつらみに基づくものではない、ということです。先に例示したカザフ人青年リーダーらの発言に、敵対意識のようなものは全く感じられませんでした。近年中国の影響力が強まってきたとは言うものの、「21世紀における善隣と同盟に関する協定」を締結しているロシアとの良好な関係構築は、やはりカザフスタンにとって、死活的に重要なものに違いありません。

滞在三日目の午前、私たちはアスタナ郊外にある博物館「アルジール（ALZHIR）【写真14】」を見学しました。アルジールとは「祖国を裏切った者の妻たちのアクモラ収容所」



写真 14

の頭文字からとったもので、アクモラとはアスタナの旧名です。ここは、ソ連のスターリン時代に、「祖国を裏切った者」という極めて曖昧な概念で政治犯の烙印を押された男性の、偶然にも妻だったということだけで逮捕された女性やその娘の収容所跡地に建てられた記念博物館なのです。氷点下40℃近くにもなる厳寒地

に建てられた、暖房施設もないこの収容所には合わせて2万人を超える女性が押し込められ、その多くが命を落としました（収容者の中には複数の日本人女性もいたようです）。

2007年、ナザルバエフ大統領の肝いりでつくられたこのアルジール。私は当初、この施設は同大統領の反口感情の表出であると思い込んでいました。しかし、解説を見聞きするうちに、このおぞましい収容所で非業の死を遂げた女性の多くがロシア人であったことを知り、それが思い込みであったことを自覚しました。見学から間もなく一か月が経つ今、「アルジールとはカザフ・アイデンティティーの象徴なのかも知れない」と考えるようになっていきます。

2017年9月17日